浪江のこころ通信

• 第94号 •

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト” は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第94号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7－2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX.0240(34)4593

浪江町ゆかりの人

思いをはせる浪江のこころ

未曾有の大災害により甚大な被害を受けたふるさと浪江町。

震災前にふるさとを離れた方、町と関わりがある方が抱く浪江町への思い、復興を支えるために果たしたい思いなど「浪江町ゆかりの人」の声をお届けします。

岩田　康太郎さん（南津島）

取材者：特定非営利活動法人高崎子ども劇場　大澤・関根
取材日：平成30年12月17日

春になったらまた福島へ！

平成27年３月に群馬に来てから、持病の腰痛が悪化したため一度も福島に帰ることができなかった岩田さん。平成30年11月に初めて福島に帰ることができました。１週間ほどの滞在でしたが南津島の家への立入り、本宮の仮設住宅でお世話になった方々へお礼の挨拶ができたほか、岳温泉にも親戚や友人と行ってきました。

春になったら、再び福島へ行く計画を立てていますが、浪江にも一泊したいと今から楽しみにしていらっしゃいます。

▲毎年つけている「農家日記」

◆避難生活での人との出会い

震災後、二本松市の針道小学校に1か月、磐梯山の麓にある七ツ森のペンションに3か月くらい避難し、8月の終わりに本宮の仮設住宅に入居しました。

七ツ森のペンションでは、同室になった河合さんが私のことを知っているよと言ってくれたこともあって、よく一緒に山菜採りに行きました。

また、本宮の仮設住宅では、たまたま近くの農家の増子さんと知り会い、米の収穫から脱穀まで手伝ったり、30坪くらいの畑も貸していただき、好きな畑仕事を続けることができました。

平成27年3月中旬に本宮から群馬へ移りましたが、腰痛の悪化から入院することになってしまいました。仮設住宅には家財道具を残してありましたが、七ツ森で同室だった河合さんが私の代わりに仮設住宅返却手続、残した荷物の群馬への運搬までしてくれ、家にも泊まっていってくれました。

◆畑仕事のできる今の暮らし

群馬に来てからは、近くに2人の妹が住んでいて時々様子を見にきてくれるので心強く思っています。

今は農作物を育てるのが何よりの楽しみで、作物ができたときの喜びはかけがえのないものとなっています。農閑期の手入れや土作りも忙しく、「ああしようこうしよう」と一年中興味は尽きません。浪江でも竹やぶの中でシイタケ栽培をやっていましたが、群馬に来た年に菌を仕込んだシイタケが今年（平成30年）の春に初めて収穫できるようになりました。

◆これからのこと

近くのホームセンターで知り合って、食事を一緒にしたり収穫を手伝ったりと群馬で初めてできた友人が、11月21日に亡くなってしまいました。

とても残念で、悲しい。でも、その人の紹介があって稲わらなどはその知り合いの方から譲ってもらうことができるようになったので、これからも大切にしたいと思っています。

今は、高崎の病院に月1回通院しています。畑仕事で少々頑張り過ぎると腰の痛みがひどくなるのでほどほどにしようと思っていますが、これからもまだまだ畑は楽しみたい。今日は近くのホームセンターで新しい年の「農家日記」も買ってきました。

消波ブロックからイシモチを釣ったことや十日市のにぎわい、雪の降った日に南津島の家の近くで子供たちとスキーをしたことなど、浪江での思い出はたくさんあります。群馬に住むことに決めたけど、浪江での生活や農業体験が今につながっています。

▲岩田さんの野菜畑。ホウレンソウ、白菜、春菊、カブ作りも順調に進んでいる様子でした

▼昨年の春から収穫できるようになったシイタケ

伊丹　眞二さん（赤宇木出身・広島県在住）

取材者：ひろしま市民活動ネットワークHEART to HEART　竹内
取材日：１月23日

広島から福島をいつも応援しています！

去る１月に広島で行われた天皇盃第24回全国男子駅伝（通称：ひろしま男子駅伝）にて、福島県は初優勝！今回はひろしま福島県人会の皆さんがいつも集う喫茶店「蔵王」にて、福島県チームの記念写真をバックにお話を伺いました。

▲全国男子駅伝初優勝の記念写真と一緒にパチリ！

◆現在のこと

高校まで浪江町（赤宇木）で過ごし、大学進学のために上京しました。その後、大阪万博準備を始めとして土木の仕事に携わり、昭和45年９月に広島へ来て以来、岡山市（岡山県）や益田市（島根県）にも赴任しました。土木の仕事は64歳まで続け、その後は有料老人ホームで管理人の仕事をしています。結構大変ですが、75歳ぐらいまで続けようと思っています。

年に一度は浪江に戻っています。中学・高校時代の同級生とは、帰省した時に飲み会をやっていますよ。高校時代は双葉町に下宿して双葉高校へ通い、毎日柔道の練習に明け暮れていましたが、お陰で県代表にもなりました。震災当時、赤宇木の自宅にいた母（昨年99歳で逝去）、長男夫婦、長男の子供夫婦はみんな新潟へ避難し、現在は福島市に住んでいます。自宅は今も残っています。

◆ひろしま福島県人会のこと

平成７年、広島で開催されたアジア競技大会の頃から始まって、来年は25周年の記念行事をやる予定です。私は４年前から６代目会長になりました。

会には正会員が85世帯、特別会員（震災関連）が15世帯おられます。若い方は40歳代、上は85歳の方もおられますが、みんな元気です。

毎年主催する行事は、４月に総会、７月にビアガーデン、10月は芋煮会、２月は物産展があり、そのほかにも、７月から９月にかけては、支援者による福島支援のチャリティーイベントがめじろ押しです。昨年からは「福島県東日本大震災ふくしまこども寄附金」にイベントの収益金を送るようになり、福島県と一緒に、大震災により遺児・孤児となった18歳までの子供たちを支援しています。

◆浪江のこれからのこと

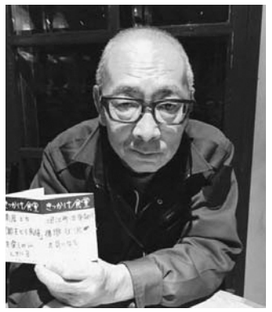
帰還した方が少ないようですが、今はまだ生活のインフラが十分整備されているとはいえないので、土地の文化が醸成されるぐらい町の活気が戻ってきてから帰還してもいいんじゃないでしょうか？まちづくりには60年ぐらいはかかると思っています。

岡部　正則さん（権現堂出身・京都府在住）

取材者：ＮＰＯ法人つなぎｔｅおおむた　彌永
取材日：１月11日

我が友、我が先輩　震災からの８年間、本当にお疲れさまでした

岡部さんは高校卒業まで浪江町にお住まいで、現在は京都で関西福島県人会やＮＰＯ法人ナルク京都ことの会会員の皆さんと共に、故郷のために人や物をつないだり写真展を開催したりするなど精力的に活動中。浪江中学校の同級生だった馬場有氏（前浪江町長）、双葉高校の先輩だった高木成幸氏（元学者・フリーカメラマン）への感謝の思いも込めたお話をお聞かせいただきました。


▲東北や震災について考えるきっかけを作ろうと、毎月11日に開催されている「きっかけ食堂」にて

阪神淡路大震災発災後は、自分なりにできることでお手伝いをやっていたんだけど、東日本の災害直後は、正直言えば「自分にも何かできる」なんて思わなかったんだよ。ニュースの映像や新聞報道で、それくらい衝撃を受けていたから…。だけど、４月にテレビでたもっちゃん（馬場有氏）が「浪江町民を助けてほしい」と訴えているのを見たら、じっとしていられなくなってね。それでまず８月に、高校時代の仲間の安否確認のために同級会を開催したら45人もの参加があって、みんなで無事を喜び合い、同時に故郷応援の思いを強くしたの。それからはストーブや毛布、蕎麦などの物資を届けたり、傾聴活動や福島県出身の舞妓さんを連れて慰問に行ったりしてるよ。

けれど、年月が経つにつれ周りの人たちの震災への関心が薄れていくのを感じ、原発事故による風評被害やいじめなどの問題に心が痛んでね。それで、高校の高木先輩がフリーカメラマンとして故郷の風景を残す活動をされていることにヒントを得て「故郷を想う自分たちが発信するしかない」と、年に一度、写真展を開催することに決めたんだ。厳しい現実と一歩ずつ前進している様子とどちらも知ってほしいと考えているから、偏りのない撮影と展示を意識している。「たもっちゃん、高木先輩。ありがとう。お疲れさまでした。」という気持ちでこれからも続けていくよ。

浪江の思い出といえば、東北一だった鮭の簗場。イクラを取った後の鮭をもらって、おいしく食べたなあ。十日市祭には、木下サーカスも来たんだよ。どんなに離れていても、生まれ育った故郷の思い出は消えないね。浪江町に戻られた皆さんはいかがお過ごしだろう。懐かしい昔話もできるコミュニケーションの場として、復興公営住宅等に４、５人でゆっくり入れるお風呂があったらいいんじゃないかな。

久保　利江さん（川添出身・北海道在住）

取材者：一般社団法人北海道広域避難アシスト協会　佐藤
取材日：１月17日

函館で、故郷「福島」を守り続ける

北海道函館市の五稜郭公園近くで郷土風味『魚来亭』を営む久保さん。結婚を機に浪江町を離れ東京で暮らした後、夫の出身である函館でお店をオープンし、今年で42年目を迎えます。福島にゆかりのあるお客様のご利用も多く、函館福島県人会の集まりなど、人の交わる場所として、地域に根差した故郷「福島」を守り続けています。

▲左から　長女の長田加奈江さん、久保さん、長男の英隆さん

結婚して浪江町から東京に移り住み、函館に来たのは昭和52年のことでした。主人は運輸会社に勤めていたのですが、主人の出身が函館で、長男ということもあり、函館で暮らし始めました。主人が元々料理が好きだったこともあり、郷土風味「魚来亭」をオープンしました。お店は海鮮料理が人気で、刺身、焼き物、煮物などを提供しています。

息子も料理人で、東北、関西を渡り歩き、宮内庁で天皇陛下の食事を作っていたこともあります。主人が亡くなった後、４年前から帰ってきてもらってお店を一緒にやっています。

娘もホールを中心に手伝ってもらっています。私自身も、もうすぐ80歳になりますが、まだまだお店に立っています。「まだママいたの？」「このお店まだあった！」なんて言われるとうれしいですね。「福島から来ました」「浪江から来ました」と言われたら、本当に会話が弾みます。

浪江町からは、親戚が季節ごとに食材を送ってくれていました。６月になれば梅が届き、その梅で梅酒を作ってお店で提供したり、11月になれば新米が届き、新年になればお餅や干し柿がたくさん届くのが本当にうれしいです。干し柿は本当に楽しみで、主人の大好物でしたから、「もったいない、もったいない」と言いながら大切に食べていました。

浪江の思い出は、小さな頃から夏になると請戸の浜に行き、海水浴をしていたことですね。平成28年10月に同窓会、辰巳会の集まりで浪江町を訪れましたが、津波で請戸の浜が何もなくなってしまったのを見た時に、あの辺りに住んでいた人のことを想うと言葉が見つかりません。

これからの浪江町は、子供の声がにぎやかに聞こえるくらい復興してほしいと願っています。私と同世代の方々は町に戻っていますが、子供世代、孫世代が暮らすには、まだまだ時間がかかるでしょうね。あと20年くらいして、３世代が一緒に落ち着いて暮らせるようになってほしいです。